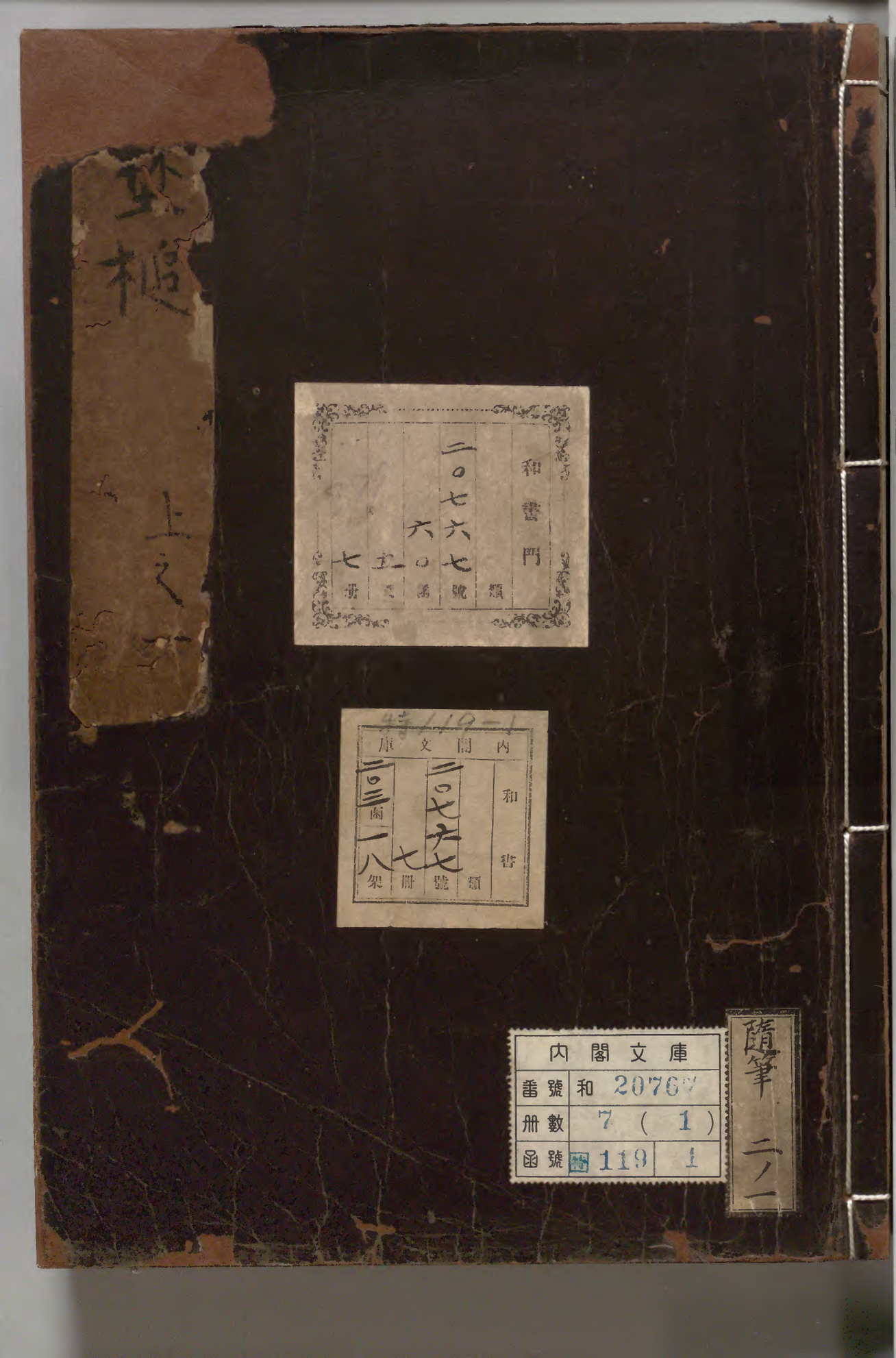

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

林氏藏書
浅草文庫
内閣文庫

人乃心ばえを祈りそめしのこと
ゝとなれるとゝりもこゝろのたの
はなをあるゝ書をもてゝ云乃たるを
ものたゝ祈い人乃ゝるれいう張
おゝ分こゝろいめそうしいこと
りまたり五ゝうまれるものゝれ
りこれ心おりゝん仏もはそゝと
ゝそ出りるゝかゝるゝそゝをたゝ
むとゝやゝとゝやゝしゝりゝる凡木
なのゝをゝをゝりゝるゝをゝる

とくさとく紙さうそくけんをき
てあるこそそこれそのまちち
くわひこめるふをつれくたい
てゝ発もあるおりともやうこれそ
ぞたとにひてをれをへたちるる
こ乃道のうちとかすき
るふおよいめをあるしきゆへふ
ましひてようゝぬとふたちぬ
むりちりやみる神世ゝかやのや
をのたちともいへいるのゝ我

つれゝとゝてのつちゆきなつく
五乃ゝるたちのわゝこの世のきれの
ゝとあさをとなりの心のをとを
草木れ狂ゝとつなきゆへなる
へ
みとのゆゝれとゝ乃秋夕部乃ちまた
ゝそ歳をとゝて年をすゝき侍

国立公文書館
National Archives of Japan

ト部系圖

- 大織冠鎌足
  - 意美麿
    - 清麿
      - 諸魚
        - 筒作麿
    - 日良麿
      - 豊宗
        - 好真
          - 兼延
            - 兼親
            - 兼忠
          - 兼敏
            - 兼直
            - 兼茂
            - 兼頭
            - 兼慈
              - 兼雅　大僧正南朝詔民部太輔従五上左兵衛佐
              - 兼好　右京大夫
              - 兼名
                - 兼顕
                - 兼俊
                - 兼改
    - 兼藤
      - 兼益
        - 兼夏
          - 兼豊
            - 兼恵
              - 兼教
    - 兼高
      - 兼名
        - 兼興
          - 兼教
            - 兼満
              - 兼右
    - 兼光

風雅集十七世をのがれて本覺法とゝのゝ
をを行なとて　道好法師
たゝひらの本覺あさき淺ゆかんなりて
ひとへき池の色は
新千載集十六建武二年内裏の蓮の花を
を折りて捨てなりける時春植物といへる歌
久堅の空ゆけるに五月雨ひろこぼるゝ
山ひろこぼるゝ
同十八雜奇下
すゝまさうき世ふりもりよ水の二字

まつ山里をれ

同十九　夢幻庵の母君ゆりふる一うを見

法華経をはつけ初ふうへてゆつりうる

前大納言為定

別ふ秋をかなしみ

あわとさうこそふらん

とをあ秋くいるふ秋をあるを見て

よい意はりつ

新拾遺集六　恋部

ゆ時のほ〻迎ふ波ゆ行ふらん

同年九　野旅部

旅の月いくタ秋ふ行ふ山ゆ

月をうらん

同十一　思久恋

思ひ恋又ふてゆ

人もうう猶

新後拾遺集八　炭竈

もえ煙を年のはりひきにあ〻ふ煙ゆ

松ゆつ木をうう

同年九　離別部

秋ふ〻ふ第ゆ松の第をふ生ゆ

なく山風さむし　同十六雜部　後の世を祈る人はとそたてまつる

新續古今集六　百首歌たてまつりし時　草

の枕の那へに茅葉乃露のかゝれるかゝ

風さむしなり

同十一　恋

みさひにのうへにむすもたてまつる

へふりきんを

同十二　玉津島社小なりけるなかに祈恋

いかなるしるしをうけしるはしらねとも

ちかひてそたのむ

同十三　戀部

ちあ人をわすれうすゆふまつ山の幾夜をこそ

ねりなるらん

同廿十五　絶恋

うたゝねにふれうきさまとかこちいたるを

をしむなるなを

同廿十七　雜三

ゆきまえのむしそなりのりみち集散ひ

なりかひなるを星

以上十六首乃五代の集より尺てなり

兼好法師自讃歌二首

ゆふられぬのこりなくてうき雲乃あとなき
りはてぬきさらぬ月ゆ
ゆふ月てなくしらとも世のやとをいとそ
しらぬ人ふとはいとや

又兼好ものゝ事ありとて或人ゆたねてハ

世中とわらくへく海をしゆ河の鳴戸
をはなれ

高野山金剛三昧院ゆ兼好自筆ゆ短冊
ゆたねあり其ゆ或人ゆ南無阿弥陀仏全身舎
利と云てゆとて吾ゆ高野ゆ詣ゆ時
ゆ兼好しらあるゆうと直義朝臣を
歌と云ゆ云歌云
たらんまてきくとたゆと郭公たゆ山ゆ
のこと何らゆめん
香ゆ白ゆたゆ人ゆ生てゆ三のゆ
の花ゆ花をたくらん
理即ゆ究竟ゆ仏ゆ成ゆ
ゆとこゆゆらゆ
果の花ゆひらゆゆ月ゆ

人しるべすくなくて
越後野や雪ふる道はたどるべし
のちて人りとしをきけ

国立公文書館
National Archives of Japan

徽書記の地蔵は
或云義好が後宇
多院の小面の侍
なり帝崩ての
ちよ髻をきりて
遁世せこの時浄
寂慶運頼阿
義好の四人を世
よ四天王と号せ
とあり

つ[illegible]くらさい吉田兼好法師の作り義好
は後醍醐天皇の時の人なり高武蔵守師
直小海を[illegible]て沖直小代て塩冶判官の妻
[illegible]ゝ艶出てやりけるとゝ
此草紙をつ[illegible]くらさと名つ[illegible]
發端のゝ[illegible]ゝくらさい
草帝は義[illegible]
と草菓草菓[illegible]
此草紙は[illegible]大日こ枕草紙源氏物語
乃祢をうつ[illegible]兼好も天台の教を

をのづから道をうかゝふと見て
なほ世俗をいきどをり生死無常を
歎く時序を感じ風景をうつす男
女はまをいひて已のおもひをのべ
きり淵を小知語は文章ふかめて
好ふすまさる者なり

伊勢物語云
ふりてきき文は
日々見しみゝれば
はうこたるべく
おろかれき

つまこなるまゝふ日々なるまゝすを
ふむひてんようつをゆくすなる
をうこはやしふくもつくれたあや
うくそまれくるはゆゝ多
そまて序ふり六條宮は拾乃伊勢
物語乃玉字なふ法師とをうまて
やとなる也　閑寂はんふるゝ
日々　終日の義也　前花　日々に後はまを
ゑふれ八富士はるふ高ふあける
硯ふむひて　ゆとなく硯をむふ

てなりひよ人ふいふきたとひふるひ
四雅集ふあり
のなりと　由来ふきまりふり
うこはりとなり　神を月ゆるる
葉のちりの時いうこはりとるるなる
うこことふき義ふりはりい助語也

いてやゆ世ふむしまれてはのりりかりふき
りりおりうりまり帝れは位いいりかり
ら竹園生れ末葉まて人百れりる
ふりぬりやんとふきー九人れる指い
ら也ら人も舎人ふとりるりきい
はりしと尺ふえるむまこはていた世
るれとふをふはめかりう指りて
つりは指ふつけつ時りあひりる
りふりりみつ義いいうりと思ふら
とりやもいれり　浄師はりるうや

まことにあらぬものあり人は本よ
りすのやうなるものとおもふ
うかけるものをふらうとうかいきふひ
まうふめしるものをらうふつけていうとは
みくもて増賀ひじりをせいひけむやうふ
名ちくるものを仏ものへふたらん
ものおもゆるひさぬるれ世をて人中
くあるまりきかくもありふし人
をかくもありさぬれすれをそんて
あるぬすれるへあれ物うちひをる

きくみかりもて世を敬ありて詞おかく
めくあるものをひはまりくれりて
そくとそる人れおるものをそ
性見えんくれるへきれ之れ前
くそ生をつきものめんをなとう賢を
貴すもうつさはうつ見けるんからう
ものあ海すき人をもちなる成ぬし
之れくをと形みさけふ人をを
まりをてけもくをちるくか
いかさつなれありなきるゆまと

紀文は道作文和字の変体のごとき
を載せ玉ふ人は殘ふんこそ
いとゝうるはしけれなとつゝふらを
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
いとまうゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
うゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
いそやゝ發語詞也
いとゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]最もおうとあるとゝ
可畏とゝて傳ふも日本紀ゝ[illegible]ゝ
とゝゝ

竹園生　竹園ゝ親王をさして王子皇
孫ゝ末葉まゝてゝ云義ゝ園生ゝ生ゝ
蓬生淺茅生ゝ類ゝて生植ゝ意ゝ
古文苑ゝ枚乘ゝ作ゝる梁王兎園賦ゝ
脩竹檀桑夾池水とゝ史記世家ゝ梁
孝王ゝ漢文帝ゝ子ゝ景帝ゝ兄弟
ゝ方三百餘里乃苑を築て宮室を
作て複道を作て平臺をつけるゝ
三十餘里ゝ西京雜記ゝ孝王ゝ苑
ゝ廣猿岩栖竜山雁池鶴洲ゝ

杜子美哀王孫
詩高帝子孫
盡隆準龍種
自与常人殊

しき果樹あり
多くあり餘
多くの官觀お連まて時に人名つけて
果園といふ又脩竹苑とも名て
明詠に此花を非人間種と養平臺一片
霞此花是北人間種瓊樹枝頭第二花
とあるも皆新樹をいふなり
ひしとふき
源氏桐壺ふひしとと
ふききんふはあるなり　花を薛ふ
ひしとふきとはきこえて上聞に
とりふ左正とあ
出

一の人　摂政関白をいふ　職原抄ふ
執柄必蒙一座之宣旨故称一人
ちなみに　詩ふ匪直也人
たる人　毛詩ふ
ものしたる人とは　摂関に乃人をいふ
舍人をいふ　近衛に舍人ハ侍ふ
を中府に侍ふといふゆゑを引
てけるなり　小侍ふ侍はれゆるふ
及りて部こふあり
ふまるされと　おちつまる義

放埒とも云ふ

古今に見はすてつんをふてた侍るさ
ぬかはいとなるとこの歌ハ　放逸ら
意ふる一

ふ酒ゐ　やちまき義也　古今に
新勅撰に酒うたとて女郎花ある
ゆ酒　花は一時

うまとまとて
頼ふ乃新ふるゆ　古位六位殿上人受
たるとうかうるら良也

法師たち
木ちす　木斷也　古今木ちすあるすまちに
のらのたちよ新勅撰ハあるうめ
法ちの弱ちうかける　法の弱ちう松草紙
ふかうしむみを法師ようちんとて
ふくれきれたて本ちすのやうに見
たるとくいといるゆ　ちれ
あまきはうちくひて　いるとをいハ
ちまちを　むなれを示
なをいとをやうにて　ちうて
もあんうまをやをそ　ちまいて

コツ上ウ　小本也或
樹株　ちノ心ニ本頭

宗とやなりはいせらるけるを
清かの国ハ肥後ちゝ清原之橘の女藤
後の皇后ふつゝ　女房なり
いきりひまうふけ　ものあして
威勢あるみりまうハ極ハ字也のちる
ハ旬の字也
増賀ひしり　知州多武峯ハ住也
撰集抄一云ひしり増賀聖人とゝ人い
ゆるかりるゝ　けふりけるゝ道ん
ゆゝて天皇の御ハ中堂ゝ参ゝる
て　を行ひ　れも行実ハんやつき
うゝて　りん式時　ゝ　住
太神宮ふまゝ　行擔　ゝ
ふ爰に　ふやう　たゝ　ん
行　我身を　ふたゝ　と示
現をかり　ひゝ　ゝ
ゝ　名剣　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ

下向之海ひろき是足る人不思議にして
をかりて物和尚とまた足さ國なと
はいとてさふうしてやかといつ花
かうみ足行是とも海ものはまた
行ふを者りを足とおもひつ四日
といふに山へ物りを足とも住ける善恵
僧正の宣に〳〵宰相公濃
ひけ是い宰相公濃
もれにうるとうて国明もあり
又物はりとて人も行を足ろ
ととく御直物僧正ひうにまるれ

へて名利をすてしかとは之行ふ
毎日まてもはるまひは行
ちやうて威儀と毎之て名利
を離れ給へうとあら海へ是と
も名利をなく捨なん後いまて
行へ物へあるとて志の事や
ゆうとして立とうまひとた
僧正と門のに五ひてなるく
ちを足をうりてす海を底をかう持へ
是けを增賀い法へ大和國多武

は峯にしてふ所へいたらんとして智朗
禅師の庵乃めくりけるをおりとけるかな
庵をたちの給ひしかな
元亨釋書十云釋増賀平安城人諫議大夫
橘恒平之子也十歳父母送叡山與慈恵座主聽
顯操履潔學綜顯密尤遂止觀而悪利名絶
交謁安和上皇敕為供奉佯狂垢汗而逃去
太皇大后敬事為師而延宮中使於余世忠
出麁語又罷去慈慧任僧正入宮賀謝翼従
甚盛賀帶乾魚為劔乗瘦牸牛交先驅之列
諸徒叱而去之賀厲聲曰僧正之前駆我
誰乎聽者笑而伏應和三年如覚法師勸
上談峯長保五年六月九日滅年八十七
さまり人の名安をとりしるべき身を行ひて
為あなり佛老の極所は形も無く身を
なし況名利をや我ら一身もまつらん一佛
とならんとて一佛よく河沙の世界にあまねく
一身よく千手千眼をも具して双手両目
あるを見んか九百九十八の手目あるよりふ
あるもや叡山無動寺の足きてまつるを

足ることをしるべきものあまたあり四大假合
して人かりそめに分散せるものなれば
ゆく道にあらむ者は意をとゝめて
何ぞ俗人の名聞を貪んや
増賀上人乃名聞をいとうもてあつかうて
はるゝあるに風顛漢とうるしられを
へたるなり世間乃法師乃金襴を肩ぬ
けて塵埃にまぶれするもの乃類ひ洗をひ
けらんや

ひとゝ一向とゝもひとすむ義なり
八幡にひとゝ一向又あてらる
ゝ也　伊勢物語　みるめかりもしむ
のかりもひとゝ一向ふ君かゝりとゝ
ふくふ
人をのろうあるを乃
あいまやう　也敬とゝ也
ゝてとゝ也尺ゝ人に　ゝる美美羅に
人を云
女性　生まれつきの天性なり

しきもち
陳氏箒木にいはく、みなもよし
かたちをはなれていろ〳〵にわかく
わかれおもしきおもしろふなしいはゞ
あめやらふたつなる心はおもしろきよう
人よりもすつくれまたみやすはおもへ
をしへたりけるこしきとからきとふとを論
してんを本として
孟子盡心曰形色天性也惟聖人然後可以
踐形註云人之形与色皆天所賦性所有也

陸亀蒙雜説曰昔之聖者其首有若牛者
其形有若蛇者其喙有若鳥者其貌有若
蒙倛者彼皆貌似而心不同焉可謂之非
人邪即有平脅曼膚顔如渥丹美而狠
者貌則人矣其心則禽獸又悪可謂之人
也然則觀貌之是非不若論其心与其行事
之為不失也　事文類聚後集十八
賢すを賢みて　論語学而篇　小賢ゝ易
色をかしこきをかしこうんとふべし
いろをかへよやむしろ古来あるふりて

ちからに用るなり
けしなく　無才なり
志れらるゝ也　日本紀二十五云大夫以上各
有差降
けれて　度量なき意也
文のうち　讀書学問の道なりあとしきと
ゆきとゞく　主識これあるしとありと
よのおもよろつ物ふ心用て故実をおもし
をへをたるる者といふ　標中のすとも
よくわきまへ知たるのちにあるそ。

ゆる　すへやけいゝもと讀て標中の
行事もとゆるの通りことゝもいふ
人の鏡　唐書魏徴薨太宗臨朝歎曰以
銅為鑑可正衣冠以古為鑑可知興替以
人為鑑可明得失朕常保此三鑑内防己
過今魏徴逝一鑑亡矣
まなもつるれゝもてはしるさき
東坡文集云真生行々生草真如立行
如行草如走未有未能立能行而能走
也。河海集ニ云真の字ハ人の衣冠をと

しき神也行字ハおりく神也草字ハ人
れまもる神なり
けこ　酒をのむ心ある者をハ大戸といひのみさる
者をハ小戸といふなり白氏文集に見えたり
身分までも上戸下戸といふ酒宴遊曲
の座までもその家にハ悪客なりとて
みまちるかとにのとまりや能とも
餓鬼ましけこ（饒子）にかうつハ（器）ものとあるも
いやしき義なり此侘ふても俳やし
かくぬやうまもいへるふや

又いさましうするりしけこなりなとは
いふ見なくとも無下に窮して酒をのむ心
もいふ義にてあるまじや物ましと痛飲と
云つるハ志ありて多くのむなり
此侘人は世に生きて人のふしをいふ
は王公卿大夫士より是をありさ浪
いひて法師も手まてにいひくし
世にもてはやさる者をあくかれきるを
ゆふまく無好りあれ上よりいるこし
かくれなく人品を誹してまふましよしと

かくらまをすゝもてんをかこきたうつ
けんといへる山屋敷あり其ふ
す藝ある後ほうきるを男みるわさ
とをへしと云へる義ふ所なり

伊勢ひ屋ひ屋敷の設をもうけ
民の慰國のうこふをはかるとす
ろつにさうらをつくていみと
おもひ不きちの人うう
きておもふとうなゆ迄衣冠
するを馬車にもるまてまこたこ
てらいよ美麗をりもひおもす
かうれとうの際及ひ遠城も行順
沙汰して禁中ひすうらかをを通へ
るもおほやけのまををとをうう

ふかをとりてよりてやすめしら給ふ

いふ〳〵ことの程の代　史記秦本紀韓

子曰堯舜采椽不刮茅茨不翦飯土

塯啜土形　六韜曰帝堯王天下之時金

銀珠玉不飾錦繡文綺不衣奇怪珍異不

視玩好之器不寶淫佚之樂不聽宮垣

屋室不堊甍桷椽楹不鏤茅茨偏庭不

翦　群書治要引六韜曰茅茨之蓋不

翦

きよう〳〵　清女也　茅屋乃義なり

とこうさ記　所狹なり

おもふとうふ〳〵　たりひつきうきやや

ふ〳〵うの義なり

の帰家の遺誡

一巻あり　右丞相師輔

公なり

順徳院　後鳥羽院第三の皇子也　禁

秘鈔一巻あり　禁中所作也　名つく

おほけのなりとも　帝王へなるとも

なり　乙の字をおやけと清音也　遊仙

蔵すは天事とおもひておかれしとも後
世
此所人の君としてたのもしつまやうの
ものときこゆ〳〵の賢君をもとめ
て國を憂へ民をうれへて用を節せと
ゝ
ひとうらうやうことに謙遜してすなわち
こゝ聖王ハ上にあらはす善相公の意
見封事を見給ひしに我朝神明あまた
ひつき給へ昔より國富民ゆたう
あり天俗うすくすなわちきかりく邪さち
ありそうあり一國の政たゝ一身のこ
とくこゝ君子國と名たく百八虚名
よりすなわち古德をもとへ政きひくなり
りてゆくに佛法乃ちゆく我朝まつる
ゝ欽明天皇より溢觴して推古天
主ゝうあるいよ〳〵さうるゆへ君
臣士民よりなかて財産をつくり田園
をもとゝ多くの寺塔を建立し天平年
中より大寺とゝ大仏をたくり天下の工を
費し諸國七道ゝ國分寺を作りて

費をてよ正税十分の五をもつて桓武御宇より
及びて都を長岡よりうつして此京を経営
し大極殿豊楽院をはじめ百司乃つかさ
のかりとうち王子姫宮の第宅后妃女御
の宮殿人の目をかすめ倍々一昨謂大内
裏とおもはるる所天下正税の費五
分の三は及ぶ所仁明天皇位をつぐ世始
ひてらちに紡績を愛し器物をもつぱら
さい綿綾を進ぜさせ弥ふかりて農業
をさまたげ女功をそこなふ所をよる酒色歌
舞のあそび古今よりもとるる所とあり
て府庫しきりに賦歛しをけりさ
天下の費二分の一なり貞観年中に應
天門大極殿焼らんを昭宣公力を以
て期年の間に成就の功をなすといへ
其費多分なる所なす二分の半を乃ち時
をそこなひ十分の一をあつる国の衰弊
をなしてなほ一日の安なるこの
明君倹約をこそ騎りとなすべし澣
濯の衣蔬粉の食治世の法なるべし今

王化おこなはれすして俗うすく上中
下ともに衣服飲食の奢り都鄙
のきはいたるまで日々に行はれて
ゆくさきをしらず其あり
とかやさて貞観元慶の世より王子大臣
も皆生絹筑紫絹汗衫夏袴
みな月西絶袴上表袴
うへ糸あつ生絶きぬ横ぬたり
深ぬめり裏ぬめりの袴今
も諸司史生のものも白き縑
白き絹汗衫のもしろく
白き袴をきなれつつ蒐褐
なつのうへすやうして女は衣服婢妾
かりそめにもて新紙越前を
袖を一入耳入れの紅なる衣を千聲万声
の砧に裂き捨の如くなる奢靡あけくれ
ゆくさきをしらず田園荒蕪して盗賊
おこり獄訟多くして
正を
聖徳をうしなふ
遠使を作りて人品をうしなふ
下衣服乃

制法を施行し給へとそうせいとハ延喜年
中よりそうしのことうの封事なり是
をもて延喜の帝時さもやあらん
なほ末の代もしらねばそうせい
兼ねうせのうをさしもの偽名の遺
誡順徳院の作るみ所勝ゆへ作
ぞ
いとしくもこれをこそ心男ハ
いやしけれ危ふき当ふきを地
うすきを高ふかくあらんとて不ちら
すまじひありき釈のいさめ世ぞ色
をはこむしよんぞいとふかくあるさた
思ふれしらいひとり寝うちにまとる心
和ふきそたうそ色ちるとてひそう
たくるるうるまはあらて女とや次
うすれもいまんこそあるまりる
ハさわさふ

色あの所ゆゑ　文選に宋玉が登徒子好色賦あり

ちらし　ちらし　ちりき義うり　後拾集

寂寞とおもてちらさしとあるもおもて

もてはやしたるあえふるへ

むれちつき　金樓子玉巵無當　桂花無

實　宋玉琢字稽玉位中書令筵席虛靜門無異賓玉畫眉曰稽

玉亦是玉巵無當爾當底也今俗猶有匡當之言　顏府

あつさきるさ　性さる来さまよやこふる

ふるの義　ふるふへ　八雲御に也

するかするとあり　意に　とあり

とすまえかるをかすまいあるひしとて

あつさきるさに　源氏はすきまよどあま

えかるをあつさきるさふて

たうあま　やさしき意ありかめ

ふ祖心　多郎老になきあるふさ海

いやおう

ひさす　ひさへや

をうま　風流とて在とあま　馬糞

きうまをやへ人いとまとして

わまをかるきり　獺はさるまも

秋月に又野辺のたりる女郎花いつまで
の人うせまてうるへき
時色このまちるはの人情にあらさる
毎下のうかりと思へは草ゆうんいせ
おうし求る妻といふ人はいはりつまき
もれなりとうひ人をうるもれい
ものあるをしらあるといへは草ゆうかをふ
ひうるなりといへは草ゆうかをあさ
うすはうはうをたる飲食男女をあ人
大欲なりと孔子記に見てうを孫を男

女ひとり大欲食をうるをあうて人をすて
ひうるをなり蘇武の胡国にありて十
九年まて艱難をこのき忠義を全すと
いへとも胡婦をめとりてをうをはう
と色欲の道に蘇武もまあるうをある
つをと東坡の詩あるをと孟子はあるを男女
のをを人倫のとりをふをいうんそ蘇
武をひうるとをんやはを色の乱るはを孟子
の南子にまをて漢水の女をうを問を
恋の山をはくしの孔子のをふをとをいへき

ゑ、美女うひうすをしたるをあ
きるゆうといへまたはけてあるへきる
かゝと、独居てくゝ妻あるをわるくすして
又母の老をかつりこさるはゝ孝乃
うちれをしるまゝ親のいさあ世れそ
つむよいそ後ふしといへれいいう行る
へきゝ人をやふふ者をはするをいとと
人をうちてゝはするをへうこと
男女は人倫のうをしてあるとすき
て淫ふまゝ人倫をみさるゝ敬はするれ

ゆうゝ色不及ふきをうとすゝ
無しむう孔子八関雎乃詩をうゝて
たのしめゝも淫すゝとは使ひ
事君の色ゆあむしすを論して
むの心を天下ゝ乃ひろめて回みう
この女とはく邪ゝうしむるゝ男しる
ふ角ゝ傷ゝうり

後のきせんをわたして仏のちうせ
ぬちうみ

行ことしあく世
よ求めるにあり
かを祈ふりの心
行しとあり道
遥拝云猶有歌
待者也

不幸に然るうりん人氣に飛行
なと如つ不思ちりるはあって
あるなきこに門さこめて行ともふ
あくらしたるちらるかたにあまり
顕基中納言ひいけん配不身飛な
てらむすちて笑てめ
ふかう　一女小深の字と也不幸の字
是ハ
如つう　やーきと義ハ
顕基ハ中納言　西宮左大臣高明公ハ

顯基の詳
は續世継は
二所はあり

源大納言俊賢卿の一男なり
遍照寺　晉中納言顯基とゆ人います
るとけるを後冷泉院の御時朝につかへ
て家もいとめでたくかしこくおはしける人なり
とぞいえなんとして二たゝび位のほどはな
けるゝ常ハ柿のとがをりをきて世を
のがれ給へなんとなんたのみをるをも
いとなほ猶ほいまゝつきやをはさりける
ハ常さうがくなりをはひしに中納言
天台山にのぼりてかうらんとて大原と

云所にまかり行ひすまゝていまはかりの命
相ゝつゝ　そのゝちさいかの者は
あるを飛なんとして配所の月をうらやゝと成
をなゝ　古墓のほとの世ゝ人と名を
ゝす年ゝ春草のこゝとけりと詠て
もゝゝすなるゝ秋ゝ　ゝるとゝや
りてゆゝの草ゝ戸ゝ　ゝうていひ
をりてゝゝ　生ゝ　ゝ
のゝをゝあゝ　ゝ
あるゝ遍照寺に詳略の二本あるなり

後はさのかし載らるとあり一ケの市三
よ云しり播磨の國竹田とらるるに
唐りしもしてかくこなる尼ケ崎とい
ふ処は遊女とて行ふ人ありとも
とあり〳〵さもとうるあや能の中納言
顕基とかたりまをりて一度ケ程なる
あん行後を行うるうる伴うるる行
うん行先所をなりてきうに行り
て後又も遊女ひとうるまりひをなと之行
まをうるとうるる或ハ中納言ハ
あに学て西國まを拾遺きうを
うかひて後をきうをてみうに國かた
ひきつうをてかくきううきさん
うきを見おかかれさにあるとなりて
も神うかはるのどとて拾に宋の書を
て後ひうをうを見ひとりて此不に唐う
とかうはうんて見ひすあるて行を
りうケをも中納言を見うあひてあ
きうるとうるこうを行ひうるなりて
尼ケ崎ケうるあけくを今花

ゆりかうはのふ本意のことく往生
てまりておもひ人におくれゆりかうをま
なりぬ註とてとぬきまて松の木
のちてゆりしん柱なをかくす様ふ
もりし麻数かりひやしきて行り人
里をしえるにとちりゆるにふるあ
女のいまてやかくしてあやしけれそ
ひきつくろひゆりかあかてなをはいう
かいまへゆりかへとをていふをくゆり向
女といひなりさやしぬあかひ人あとに

あまとめまえ人にすきなれらるくわきれと
をさいきく君ひとゆまていかきなる物
をひるすほさにこやよせておさなそ
にかんいの猶いみしくええてゆり此
中納言もいうしき往生の人まていまそ
かりをも得すはのせて得てはさやうれ
身みてつまをなきいのねもひあるて世
を秋風の吹にかゝるにかくとはみなました
まんまやうの菩薩のやさまてしくいまか
くふらめとおもいまそてをなすやかく

ゆるすべき仰られ
配流のまつりごとにてらむる　配不流罪
九重九人のあるべきなる
配所はむかしも配流あるべし遠国海
島なりもしかるべきにあらざる時あり
賀茂ふたつ社家にて
いつも配流なるべきものあるべき
あるべきにかやうにいとなつ
とのまひらなるはあるべきなるべし

う罪とさんにはいたして身を人をいつく
も配所なるべきにせよ山人市
原まで身をそのあるべき方に罪なるべし
ひとしらず身のわれをむしれ人を
ひとしひりる
罪なくして配所の身をうむと云つまて
菅右相のすなりひあらをらまし仰る菅相
西府に左遷さまして九月十三夜詩曰
昔被栄華籍組縛今為駆謫草業囚月光
似鏡無明罪風氣如刀不破愁隨見随聞

皆悽愴此秋獨作我身秋に対するかく
はなはだ也あり色比藤欽夫作紀州弱浦
菩薩神廟碑其器云都府樓之瓦観音寺
之鐘幽欝無聊之懐不可掩也蓋非素行
之学而然耶非耶當時詠赤駒几二者有
耶無耶彼一時此一時雖欲無不豫之色
其不可得焉不可為非素行之学也と云て
うま富夫みて貴賤みて夷狄みて患難
みてじふとうとして自得すと云ふ
なきは素行のうるなる者相と我邦に

為儒なる者を憂へ民を憂ふいうん
不豫の色なるべんや菜有の悲の時
をおりひ蜀魄の声に応をうまへ峨眉
山の月小秋をれ[illegible]の吾小馬
を返りていをやうの涙を催すにやまして
但羅の夜長沙の風飛ありもやうん
ありとやうん天恐文人未畫才常教
雲義士高業と元遺山ういの句さる
すうや業相頭巻なるは此いうあり
ぢん美器の琴うは天王聖明ありと

なるあ、東山の西ゝは赤鯛几ゝたりと
うゝゝ、参相頭基の反ゝたゝなり
人は德惠術智は惠雅ゝすゝむる
あれゝ宮矢あ乐なるゝゝを行て
孤臣孽子ゝを守れ給へ

ゝ分のやむゝとるゝんゝもおゝて
あゝなゝゝゝんゝも子ゝといふもの
なゝて有るゝんゝ御中書を以来
大納言花園ゝたゝみそう
殆んゝ我祖ゝ山陽殿
もゝ殿おいゝあゝそゝゝゝ事のおく
ゝ殿ゝゝゝゝゝゝゝきゝる地ゝゝ業
乃義の物語ゝいゝゝ聖徳太子の
御墓をゝゝそゝゝゝを殆ゝゝゝけゝて
をきれゝゝこゝゝゝゝゝあゝゝ

と思ふ也とこ行らるるや
子となるものなくて　一かたに女子と
いふものなくてとあり
前中書王が弟兼明親王延喜の子也
詩文能書乃人也是平親王をいはゆる中
書王とし也
九男の左近左衛伊通公也
花園左大臣　有仁也　後三条院孫
輔仁親王の子也
はるうまうん書をそうう曽の家

子孫をいふ韵會ニ曽ハ重也自曽祖
至無窮皆得称曽孫
清慎乃親王　貞房謚ハ忠
仁公と申也　清慎の后の父清和天皇
乃外祖父也
世継の翁の物語
一名大鏡　友原為業　法名
寂念といふ人世継物語をかける
天皇　十二代
百七十四帝也　天皇の事　我
こうきう　二代上皇　清慎の大臣

子乃ゐりさまあるとうまつ
さうらうやうとのをうう

平氏太子　用明天皇乃御子也厩
乃ゑとりてむまをしたまふの誤と歟
の宮とも又上宮とも耳とも
ゝ也

平氏聖德太子ハ曆日太子三回御陵
勅墓土日汝断酒路朕意趣有二者為
今無大行道之煩二者我子孫為今無
日本之相續又同子孫不續豈云大処日

孔子遺教無後嗣者為不孝矣吾為釋迦
大聖第子豈為孔子小賢乎子子
此限子孫のかきをらたるもりといるは
荘子ゥ多男子則多懼といる意ふる也
子ゥ道ハ人倫を離まつて男女よりて
又みあり又みあまて則君臣あり兄弟
あり朋友あり世をはらふる者方ハさ
きよかんをを祈ひて人倫の道をかる
ゝ聖人のいはゆる也伊ん人を鳥獸と
群ふ同うきんやゆるを伯夷叔齊顔淵

孫あるをきらして後かきを不孝
とは夷齊顔子も不孝のつみを
いふ人あり大ふる僻なり夷齊顔子
はとりてするをもちゐるよりもとのつゝをまもる
をもて命とせて彼山林寂寞をこのむ者
うゝ私をもてゝ孫かゝんをもて人
のこれをもてんやかを佛光をこのもて
父母をもて夫婦をくるるといへと佛光
をもてをもて孫かきふあるもてこゝろ夏總
持經を尺行ふかゝ釋迦の妻ハ耶輸多羅

ふりをもを羅睺羅といひを妻を瞿夷
といふ羅什三藏も妻子ありきふあるも老
子をもを段干宗といひ宗う苗裔假漢
文帝ふつゝをもを道士張道陵も之孫
かきふあるもて佛光もいんそ
人倫をもてはてんやうをを学ふ老を
ろゝあるへてかゝりてゆくりをを
聖法をもを名をもをうきこんなをと浮屠に
淫溺ーはふゆゑ後の世ハ僧徒ふたわ
方人をりと依記ーしてそれとを記る老

此段ときまるまで法あるをよしとすべしと
いひて釈迦は大聖孔子は小賢なりとがう
説を見て取とうるあるべし冒黎う
所謂不惟舉之於只而又筆之於書といふる
けふとうとうとうとうとうとうとうとう
明らかなる道に行はれて道に
たゝみの孫なんなるを移ひ拾へるを夫
下を今に法ふあるとおもひ拾かるん
大乗は法の滅肆姥坊即千道場なりといふ
末世は法は肉をくひ女色を耽りて家

の人を失なうとけりて小乗は部て法
拾なりと成人のやうされはいらるん
毘曇は雖劣佛法根本といるもこえる
所なり又後はかるはは劣なりとして國乱
を内寵おりて士庶人は妻妾をわかて
きは精氣をけいやしなるを孫を得る
さきに国家の破るとあり病をうけ
てなをうるなるあり也ふ人は種族
を天地のけきまるとありて我をてこう
秘なるを孫を連續して生まる何

て天地の理より出る所を道と云ふ陰
陽不測を道と云ふ易も軟らか
なる天地の間種類の大小多き
ものゆゑ孔子は好色
を過不及を嘆ずゆゑ
といへり孟子色を慎めといひ
また妻子を私するを不孝として又後
なき三不孝乃第一大事と云るなり

あり一時の寵愛ゆゑ家部
山形烟草そのこと信ずるなん
あるいはものあれもなん世い
ちうるあることそいかれとあるい
ものをつくる人をうらきいるし
けるものゆゑをまもり友のをこの
長秋を主るものをそうけるとと
一生をくらしかたをこうあもいふう
のもやあらしかと思ふるを
をつくるものゆゑ一枚の笑のつらこそ

をもとりそへ世にきすることを
行えて何のいとまんのうるはしい
厚おかしなくもしも四十にうち過
かりそめそるんしてそやとるべれ
るのりをきぬれいからうちをいる
ひもなく人にそまあり所ひん事を
思ひ夕の陽にるを詠ると愛して
さうゆくを海をんんまその家に
あらましいさすらう世をもさうる心
のこゝろものありしもさうひるか

ゆくなんあさちきき
あさ野　あさ野のをきの末こ
ひ秋風ふこゆるを玉川のを　俊頼
うるこ哥枕を見侍
國にあり或曰山城國にあり俊頼朝臣玉川に
うこ合をうの玉川之河もの名所も多
多　清輔の歌に名所あるのをうる　八雲歌
に石窟を詠ある哥合の判詞にあ野
又たうるあるところをうるあ
又化野ともけり
河海に承暦の哥合に

性靈集十云
天長四年五月
勅擬大德於
中京西寺北陸
奄然而化荼
毗東山鳥部
南麓
世継中卷云長
保三年皇后東
三条院詮子崩
十二月廿四日葬
鳥戸野

嵯峨野をゆきてあらしの
あとをとへ　誰とてしるべ
しるの草の葉こすりの白露　徳日門
鳥部野　元亨釋書秋文亮長治堀
四條坊秋迦院治暦二年五月十五日
於鳥部野積柴燒身鎮都膳礼嘆
嗟　治暦後拾泉院と年号
顕昭拾遺抄云鳥戸山八坂の体陀峯也其
はとは鳥辺野とよ
鳥辺山立て烟乃しえたらはをり

拾遺
なるきえし我ぬらるん
こひしるみるめ　しらなもの辺山
そい烟もたするりとき　詞花　円融院御幸
薪つき雪ふりまさけるそ色野い
露の林乃こちこそすれ　はなの遺　法橋忠命
ふきはらう袖乃山乃もきりうる辺野の
なくなるる乃見くの露　玉葉　俊成
ちるふあるる野辺乃露乃辺山乃煙も
ふはそきあるる時ぬらちてと
ひうけんをあ抗とぬ久一

ひけるふのゆ（ゑまの）　名れはいのちの
らうけるもあるうきもせすむるか
弄花に遊絲蜉蝣蜻蛉野馬陽焔なとも
字をあけらり　又芳草をうけるふとをるも
あり　杯希逸莊子口義野馬遊絲也水氣
也杜子美所謂落花遊絲白日靜是也
蜉蝣ハ朝小生て夕に死する虫なり
陽焔は弘法乃十喩詩中小詠陽焔喩あり
莊子翼云野馬遊氣也又云野馬天地間氣如
野馬馳也

夏蟬乃春秋ハ　夏蟬をこと六ヶ
ハ夏ヶ月とあり　五合ヶ月を字序ふて
春鶯を春ヶとりとるを夏蟬を夏ヶ
とすむ一義あるとや
莊子逍遥遊ハ朝菌不知晦朔蟪蛄不知春
秋此小年也陸德明音義菌其隕反天陰生
糞上見日則死蟪蛄蟪蟖也一云蛁蟖希逸口
義云朝菌大芝也亦名曰反生於糞上暮生
見日則死彼但知有朝暮而已安知有晦朔
也蟪蛄寒蟬也春生夏死夏生秋死不見

四時之全故曰小年

こよふう　八十ふ事かりとあり

河海は無越ともに閑雅ともに玄ともまるとも

みーと云義なり閑雅は幽玄の義小通

もくー

足ふくまの　老ともろへらるとも

いちりゆうあり

莊子天地篇多男

子則多懼富則多事壽則多辱是三者

非所以養德也

論語子罕篇四十

四十ふ

五十而無聞焉斯亦不足畏也已　陽貨篇第

四十而見惡焉其終也已

白氏文集卷二

ゆゆしひふ孫

秦中吟　不致仕云七十而致仕礼法有明文何

乃貪榮者斯言如不聞可怜八九十匍匐雙

眸昏朝露貪名利夕陽憂子孫挂冠顧翠

綬懸車惜朱輪金章胥不勝偃傲君門

誰不愛富貴誰不戀君恩年高復請老

名遂合退身云云

ちりゆくすがた　ちりゆくすがた也　古今に

今しあまりすてし八男山にゆく時
もろこしの
世をしさるものこゝろ　論語に及其
老也乎氣既衰戒之在得　又云老而不死
是為賊といへるなどよもかなふへきにや

きれ人のゝまもりとなる色欲はたゝ人の
ちゝはをんなのふかひなきは
かりのものゝふるにたゝ衣裳ふきもの
すゝしをなゝえんなるぬいりひるは必い
たりきすゝめやう久米の仙人のもれ涙ふ
女の脛の白きを見て道をうしなひ
ハ清とふるあゝはらへなれきの記ふ
肥あふつきをゝんいふの色かゝゝ
ちゝあんかゝ女はかゝれりてゝかゝん
しそ人のうゝふつゝめ人のとゝんゝを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六塵の樂欲[illegible]

[illegible]

[illegible]

智あるも愚なるもうるおなしとみるは
ひとえに女の性もちをもれる繩なり大象
もよくつふるに女のはけるあさきを
作る策ふは然の庶ふるもよろ
しからず偽作うつくしいはゆめてた
うるつくしむべきにあらずや
世人のこゝろとなる　礼記礼運篇飲食
男女人之大欲存焉　程伊川曰淫声美色
易惑人ヲ
深く習ふ人ゝこゝろとていてき

ら かりけるものすやとうたふ　白氏文集

才四新樂府古塚狐妖且老化爲婦人顏色

好見者十人八九迷假色迷人猶若是真色

迷人應過此彼真此假俱迷人云〻

衣裳ふそきもしてと　白氏文集樂府

太行路云爲君薫衣裳君耳蘭麝不殺香

香爲君盛容飾君看金翠無顏色

えふらぬ　ゆきかふえるぬ　ゆふるとかり

ふときすすき

すゝきもすきそきてひとりぬ

しらふ

久米の仙人　元亨釈書十八久米仙者和州

上郡人入深山學仙法食松葉服薜荔

一旦騰空飛過故里會婦人以足踏浣衣其

脛甚白忽生深心即時墜落漸喫煙火復塵

寰然鄉黨契券當署其名皆書前仙某今

舊券之中往〻猶有手澤悉然嘗於高市

郡營精舍鑄丈六藥師金像并二菩薩像

所謂久米寺也後又修仙凌空飛去又有

大伴仙安雲仙二人與冬米相後先兩仙菴基
今猶在和州　贊曰昔姨女誓曰我不踏一
角仙頭不出山果然冬米見白脛而墜有以
矣哉於戲色之毀人也可不慎乎

かのいろかゝりし色香
にほひうせし色香とゝ
人はゝとゝうしてゝ
塚狐のゝるゝ
いまてらふ迷悟のわるゝうゝ
釈氏すてにもゝ論して冬米仙人の

ゝ波羅柰國は一角仙人の扇陀女は頸
にかゝる類ふゝ　又毗婆沙論ふ優陀
延王あまさは宮女をひきゝて欝毒
波陀山まあひ　小五百は仙人庵宣
をうけ足ーうゝとらをきて色を
見声をきゝ香をうきて神足をう
ふひ山林はうちに居るゝ翼かきゝ
はとゝ王は宮女をえるゝをいゝ
はるきをあきて五百は仙人は手足を
きるゝふ仙人眼識退ふ住もるあり

耳識退ハ位にしてあり鼻識退ハ位にしてあり佛は眼ハ
色を見さると好眼にして耳鼻口も
まと云ふ他は女人を見ては我り母は
らく我り姉妹はとらく我りひとめ乃
らく行くべし人うなけんやさとハ
畫龍は中ハ不淨をりらく華嚴ハ
血をとるらく觀て本来あるハ
四大因縁假合はとあるりと行くべし色
欲を断は道ふるあ見ふ云とて見て

せときもせとかきてせるんハ眼耳
鼻はあるかいるべし山谷ハ桂香をきて
禪をらるとは少陵ハ妙香をきて
心清まると莊子は鼻ハ鼻徹を顫とも
いひ道家は鼻神を灵竪と名つ
鼻ハかとうるいりんそう耳目は見
聞ハ異るんや聖賢の道ハ鼻ハ
かくこうは四分九思乃ありや
いへとも悪をらるハ悪臭をみむ
のらく西施ハ不潔はんるハ

鼻を掩ふといふ時は和の長き鼻
なるをのて掩とうしらるべき
事也
女は髮なくてさうん　詩君子偕老
篇鬢髮如雲不屑髢也　左傳昭廿八年昔
有仍氏女鬢黑而甚美光可以鑑名曰
玄妻　文選西京賦衛后共於鬢髮
飛燕寵於輕
けうひ　河海小氣の字をよめる日本紀小
形勢とうき　新撰楽記小景氣と也
水後にうちあつる
水にとあり　平人をこのみ後ハ
常住我の義ちがひ　さてあるさ海苔
角
うちとけらいて　後遺小君ある
風ふかるる　風ふかるるとけらいて神
さるへてあるあるさわて　塵也すく
もあるあるたも　塵をすうる塵をすはを
をかりふり　敷ちは

也着也ら　見也執着ゆり

六塵ハ樂欲　眼耳鼻舌身意を六

塵とし色声香味觸法を六塵として

色欲をらして

いろいろしの心法ハ六のもの人

まもふらん

女ハ髮もちをよりる綱すハ大象をよく

つなぐ　或人云女の髮を大船をひくこと云

る梵網經の說ハ有ることなり

鹿笛の作樣の書きわり鹿のくくりの皮を用ふしあり又鹿の耳のうちの皮を用ふもう笛ハ吹ときはうそ吹なり

女ハはけう殿をてつまる笛

鹿笛図

ある人ハきわ近代冬の國安部山

人ゑのもの所ある遊女ハはけう殿

をとりて吹り笛ふけるとて鹿の皮山

中ふの皮をゆるふ鹿のかたをよるる

事ハあるとそて作る笛よるとて吹

ものとそうあり

今年慶応四百四十三云　江陵　松澤枝江村

射鹿者率以淘河烏脛骨爲管吹作鹿声有大號小號呦呦之
脂膜作笛吹作鹿声則麀鹿畢集蓋爲牝声
異或作鹿鹿声則麀鹿畢集蓋爲牝声
所誘人得殺矣而注之
山獺と云獣あり肉補益のあるもの
海狗瑣陽内稜黄ふくるもの
しまわるもの
つまて山中ふかく山獺のあるをうる
かふ女木の下あり山獺女
の氣をうまして生まれる女なるべし山獺

こそ木といふたてりうへあり其木より
まれかる獺師女をとらふといへり此
ものか草綱目ふんくるに鹿の女化鹿
笛をきくしるやおのくり
ろうろうのめくり　自警とうた
朱文公自警の詩に十年浮海一身輕帰封
梨渦却有情世上無人欲險我人到此誤
平生と云(ヒ)ぬ沙のんを宋の胡澹菴忠
肝義膽ありて秦檜う國賊をあやまるを
いきどをり秦檜を斬んとり表状を指

まよひ南方へ流されゆくに
還る時湘潭にて酒をのむ樂備と云
女を顧盼して梨頰生微渦といへるを
朱子かゝ作りて自警とす微渦も味
新に忘れがたきをいふ樂備を梨記
きえんを美人の色欲の海とひとしく
いまゝてはこれを朱子にいはるゝ
をもつゝかひひ作る濃菴の節義奉檜
の威をおそれすして梨渦に情をふあ
らはさんとに鏡作心肝也斷竟とあるを

也海のひろき項日高祖はそけく勇猛
虞姫戚夫人小弱なるを流周郎の
赤壁にて美德を見るも小喬に海と
なるもあるも海にて洗やうあれ人誰
く色欲を斷んや朱子のこゝろ海
然らもとおもこと大賢君子は四
海の色

家居のつきづきしくあるまりきさらぬ
かぎりやどにはおりゐやどに異あるわかぎ
りきえんのやうに住なりる所をけり
ぞるあるのをしきはさらさらと足拭う
うかいはめりきさらるるもと木
さちかりてつきやるめ庭なるもんあ
ちあるの間度もむりおりてやも
らるるるるるるるるるるるるるのき
とれんとけりてみるまりきして唐れたれ
めつつしえかるの間度ときるへきき

お栽のまはまてんれ海かるけるを
なせるは尺るめもるるるるるるるめ
けてもやいれるへ住へきえ時のまの畑と
ふりなむとうち足れるるるるる大
まは家居よるるとにはりはるを
つきづづく きもけりの白をを義るの
俗よつきのうきとるるるるる
りれ居りり 逆旅 寄寓
きへ入る月乃りの 撫山乃山人の
寄るたてやや人へ人ものん草れ居

月とをみうり秋も来るあり此所
ゆて出所をたづねて
ゆめうくきらくうの体と うるハ
しくこうきとてたるはハ行体も
とゝふ意なり
木こち地ふうてわさとあるゝ庭の美
わさとあるゝわとゝ とうにうすうに自
然の体なり陶淵明の時庭柯以怡顔と
いひ又木欣欣以向栄とゝひ周茂叔の窓
前草をうゝにして自家の意思と一般

なりとゝ所なりひ地作る
ものこ 簀子と書
ものこ
ものこ 透垣とゝく
てうと 調度ものとゝ
なる物をふと云人あるも只一切のまま
うの石具をふるうる菊亭と右府
ゆて市鄰要書抄を見侍りしに調度懸
一人二人若干人とありそもを拾くけうく
り人を云と見ゝうり
あるとなくこの体にて 家を華

兼ヨ作ルヿと云

唐ヨリ日本ノ　唐物日本物乃ゐろゐろヨリ器を云

前栽の草木さゝて心のまゝ

枝をたゝん葉ヲ折ヒろゐろわさとちらかた

てゝ物ノ姿

ゆゝしゝ任ヒきヨ時のまの烟こもりなん

白樂天履道居詩　莫嫌地窄林亭小莫厭

家貧活計微多少朱門鎖空宅至人到乃不

終歸又吳融廢宅詩不獨凄涼眼前事感陽

天便成原

ちかのゝ八家居ヨリ始

家を作るヨリ式樣八居家必用と云ふヿヨ

ア人ゝう雅尚齋ゝう遊閑八遺生八歳ヨ載

ゝう其人ヨ相應ヒ居ヒ家居ヨて云ふヿヨ

好むところハ行る居　青杖ヨ植宮ヨ檻ヨ

冊ゝう物ヒ物ヒ刻ヒヿと物ヨ論語ヨ

臧文仲ゝ居蔡をそ　まゝく孔子前ゝ居室

とゝとゝ先ゝう

恒法寺乃寢殿ハ鳥羽殿
ヨリ下賜ル西行
ガ出家ノ時ハ鳥羽殿
ヘキ殿ノ中ニ
ソノ中ニ
ヲ隆山法師乃
ヨリ拝ハ
ハカラフ
諸や島乃
ハ
ハ

人乃
ヲ恒法寺
ん

恒徳寺乃事ハ實定卿
西行　東鑑六云仁安元年憲清法師
今號西行保延三年八月遁世云云即
秀郷九代嫡孫也陸奥守秀衡入道者
上人一族也
井蛙抄曰徳大寺ノ
寢殿乃西の角乃

た府乃兩行ニ分而けるなり

陵小路ニ

爲乃もれのそ　白樂天大此角爲詩抽

巣呑燕知入簇啄蚕出ハ知れ行ふ所を

とりこのこゝにあるべし

神ヶ月乃比栗栖野といふ所をるそ

ある山里ニ入事なり

吉乃かそをとゝ

とゝなるゝ竜あり木乃葉ニ

ゆけ樋乃ましくるそ小路をゝ

ものゝし樹伽棚ニ筆和尚なとゝ

ちゝゝうちそ

へしうそもあるまゝとあれ

乃乃ゝかるゝ乃竜あ乃ゝ形

村子乃木の枝もたゝゝなりゝ

[illegible]

栗栖野　醍醐乃名也又洛行常照山城国小栗栖路傍桑子也と釋書にあり

[illegible]

なんなんけ　しりて　向ん

閑伽棚　閑伽水乃地語也　[illegible]

枝もたわゝ　枝乃たゝるも也

[illegible]

枝もたわゝ　[illegible]

此陰山路の景色　[illegible]

[illegible]

きしりくこひ　[illegible]

[illegible]

山水乃法禁　非常のあと人をかな

[illegible]

[illegible]

も　[illegible]　和嶋　[illegible]

て　[illegible]　王安豊　[illegible]

牡丹　義星寺の詩堂前撲東任西都無食無覓一婦人不為困窮能寧有所抵緣恋懼轉負親即防遠客難多事使猶疎籬却甚眞已訴徴永貧到骨正思我馬淚盈市、寺の事と云りの漢西の家に居まり其堂前より東あり西都の寡婦めすとされてくらすとして貧しき中にまかり

あはせ彼たるをきけとみえて
しこそ狩人ふ
あへしまして制
禁あへりさ
まとも他の冠
盗のふせきのた
めに離とをし
ゆへしきを
こりを停止
かすゝる何を
此婦の貪困
とえて世间に
禁乱とだす
出しかれし
むとや王義
か心を推廣
めとし仁政なり
ゆし文王の
囿へ芻蕘者雉
兎者の行と此
心あるゝ王義

うへん事をきゝてさねをきかせて
うは陸亀蒙が楊ハ野人にかくさす
王倫が帳下にハ樹をそゝきぬ皆これ
愛惜するところあれともいやしかるぬ
みないあるひハ明府のもとあるは六波羅
家ちの御心講堂ありに橘をもとめて
常に愛し弄びしかハ死して蛇と
なりて橘樹の根をまとひありける
となん

…山里に…子とりこひらとき…心ノ通せり

おほかりし心ぐるしき人とはやなる物語して
おはしきことも世にありがたき事もし
うちあくひなくさまなこれうれし
しる人きてける人来ますなれは
露たちいさらんとむりなひぬるらんは
ひとめある心ちやとんうちひはしらん
なかの事をいふにやうひあるなの
うらいさりそうまに心もあらん人こそ
思いさやい思ふなれあらそひかて
みさおかしされうもうちなるたらいて

われ〳〵なるさまの心ばせ人とげのいすこし
からうるも我とたゞひとりさまを
大事のようなることをいそがとこそあ
めまゝやうの人のなるうるへらば
形乃ゝあるへきをとかひ一きや
う明く　表裏もふきまり心底とせこ
さる義なる一
つ程をいさん　すこしもをうたん
ゝ
おつはをひふやかゝやせこう

ひあるふ義なる不朋友ハ切に偽
こゝろおろや
つまとひゝかゝ所ん　伊勢物語
ものいそてうをふやうへきわまと
ひゝき人一ゝみなを
心除をのまをしまつる友とふたりつ
を始をを物語をふそうひふ語
するうちにすこあるふ
いち益友なるへし　を人まわるまいちろ
ゝ乃ゝれ人不をちひうへ面友する者

ひとり灯乃かゝるをよしとしてあ
さ乃人をなとをもるをこゝろなく
さ世ゝなる文い文選のありしるゝ
ゝ白氏文集老ゝ乃とい南ゝ
乃篇ゝ国乃内ゝ士とゝのうゝもゝ
ゝゝゝのゝあゝれなるゝのあゝゝ
ゝゝ火のゝと　韓退之の街讀書城南詩
曰時秋積雨霽新凉入郊墟灯火稍可親
簡篇可卷帙
ゝゝをひゝけて　擬展

見めせれ人と友とも

唐書狄仁傑伝

兒時門人有被害者吏詰衆爭辯對仁傑誦

書不置吏責之仁傑曰黄巻中方與聖賢對

何暇偶俗吏語耶

司馬温公獨樂園記

迂叟平日讀書上師聖人下友群賢

こよかう

無超と書るとあるとき也

八中ふけうふと云義也

文選

梁武帝子昭明太子撰とうや

周のまとと六朝まてに詩文をあつめ三

十巻あり唐の李善註をつけて世ふるし

李善ふかふ呂延濟劉良張銑呂向李周

翰五人に註をくわへて六臣註と名つく

六十巻ともして李善の註るきとは五臣註

と号して別にしてもの漢書

中ふとふ蕭家に點ありとして

白氏文集　唐の白樂天の集をりわけ討

すると長慶年中まで詩文をあつめて

白氏長慶集と名つく五十巻にて五帙

ともして元稹序あり寶慶の後のを加て

七十五巻とし白氏文集と名つくと乃

世に行はるゝは七十一篇あり十帙となる
帙は書衣なり書籍をつゝむなり也 渤
海は使名なりて常に宰相は海を尺て宝
玉に似たりといひ名て宰相とする故に
ものなん 白氏文集第一帙
二は帙つゝみ握翫もてあそぶとあり
老子 姓は李名は耳字は伯陽又老聃と
名つく楚国の人なり周に仕へて柱下史
となる周を去て西に行き時函谷関にて
関令尹喜に逢て五千言をあつ〻授
く今は老子経なりと八十一章あり漢の
河上公なる者注し又道徳経とも名つく宋
の末に林希逸の義あり
南華は篇 莊周字子休宋人也隠遁して
書を著す皆老子道徳を意とせり三
十三篇あり南華真経とも名づく晉の郭象
是を注す唐の玄奘疏あり宋は林希逸
の口義あり莊子は文章も古今に奇筆なり
老子は莊子と共に傳あり
此国の博士なり 博士は博学得業の人なり

官符なと紀傳明經明法算道の四家各博士
をさめたり　日本の博士ともの文集ハわ懐
風藻一巻經國集廿巻本朝文粋十四巻續本朝
文粋十四巻文華秀麗集三巻無題詩十二巻
此類多し又一家にても野相公の集菅家
文草善相公の集都氏の文集江吏部集橘在
列集源順集なとの類あまたあり
此外一部に丈ハ文選老子の詞とりておりまする
巻と白氏文集とあるをも常にかりいとおほ
つかへし

和歌これたゝ我おもひきゝおもふなれハをかし
乃しつむるのこゝろもいひ出つまゝに
思ひ詠くてこそ詠しき猪の志ても
かける猪の宿とよへハやさしくなりぬ
これ此乃歌ハ一かしおもしろく
へらうと見ゆるハあれとかゝるとも
のやこゝにりそやとゐかまあれ
まもしきおもひかいとみし貫之
ハ宮よなおもてとこゑ古今集
の中乃歌くつとらひつくへく純

ゆくとの乃ぞの人のよみぬきとりて
みそなはしけるの歌のいすもとそ紫の
うらはのうらはのあり山ほとゝきす
たてゝ神なるもとうとうしく感ぬ
りいはゝとはいはゝるとそかもろ新古
今のこゝろ歌をそ
きとゝくこゝろをそ
はうこゝたもうるをそ
んさ神とこゝ乃言も衆議判の所ろ
きゝ沙汰あるそなるもの物文

す感仰下さ神ゝ乃ゝ部もの記
まいうもの歌乃道のこゝろへて
りゝゝゝなとゝりつゝ
やとゝもゝみあるる物詞歌し
むゝ乃人のゝゝるいゝゝゝ物
りあゝはやもゝするゝりして
ぬもきゝけゝゝゝしもゝゝゝ
源度秋乃野曲乃とゝゝそ又あれ
なる書いあゝゝれ貴乃人いそゝゝ
ゝはゝそゝれとゝゝゝゝゝゝゝ

きこゆるなり

和尚ことなるのあるものの二字あるを異本あり

又は前脚と此脚を一脚とせんなり

の字八文字長子なるとよりてけり詞

なるべし

おうしさを　切りつるなり

切そめしを猶　雲林寺蓮法師云ける

ものの中にいとうるさきなるのみたくるとも

花を折きのをもふるすのみ春をとひつ

也ハやうきなりゆゑてやうきなをを

折ものにいひ寄をかの事なり

詞如如　子貢ハ貧して樂むるはゆゑて

詩をうし子夏ハ詩を問て礼を修とをを

知りさきて楊亀山曰非得之言意之表者能

之乎商賜可與言詩者以此也和尚をもしも

のを又うをあるなり

貴之うしたるものなりけるに古今中の

羇旅部よりあまたうけ侍りそなる

歌にうるのるのるにに列侍のうるそもたて

うゆゑ　貴之

古今集仮名序の序くり

源氏物語ゆめものがたりに

源氏総角あげまきにあんとう

ちすゝ結ゝ結ゝ花のもとにありけめと

たゝ一人ひとりしらぬ人はきこえりけれ

ゝ結ゝ結ゝ地と八ゆかりにて作

ゆゑ此世ゝ世ゝ結ゝ結ゝ紙とゝに仏ゆゑ記す

ちにはきくひとをもとゝ人の仏

法乃事をしらぬ人をたのもしけるをたれかは出さまし

此地ゝ結ゝ結ゝ作ゝ貴ゝ

ゝゝゝゝにをゝものゝ

書ゝ

新古今に八乃ゝ松ゝ

源部氏伸ゝ家ゝ

ゝゝゝ結ゝ家にゝ

家長　源氏物語の時の人ゝ新古今源

家長初名不閑園ゝ

しゆし　薄雪草加ゝ

代数より積りて和哥代補所　家長八高明
出の十代の孫なり　右馬助前但馬守
哥代乃乃とゝにうゝめ　八雲抄よ
西行の哥にも梅をもたゝわるもたゝ物へのに
なく山乃年東代に強へゝすとみゝらと
ゝり
いゝや　不知とゝり　にうゝめと云す
とゝ云すと也
哥枕　梅　花　ゝ
とあり　花哥ゝ哥枕と八花不の哥とあつめ

壮依通典　百四十五
有慶公善
歌能令梁上
塵起

物をゝり能因法師の百仏集の哥枕あり
うゝとゝ雨のつゝこと　枕詞ゝのゝすと
ゝ
梁塵秘抄　後鳥羽院御作也　弾琴催
馬楽の歌をゝひあつめ給ふ　海底
恩ゝ有　御注あり　博物志第八云秦青撫
節悲歌聲震林木　郷音遏行雲　謂其友曰昔韓
娥東之齊遺粮過雍門鬻歌假食而去餘響遶
梁三日不絶　ゝ故雍門人至今善歌哭效娥之
遺聲也　あの故ゝらてゝひの法華塵

とふなり

郢曲　元稹の梅詩に郢曲琴空奏、流聲律

髓に載せり、文選宋玉對楚王問云客有歌

於郢中者其始曰下里巴人國中屬而和者數千人

其為陽阿薤露國中屬而和者數百人其為陽春

白雪國中屬而和者數十人引商刻羽雜以流徵國

中屬而和者不過數人而已是其曲彌高而和弥寡

郢は楚國の都なり故に奇謠を郢曲とも

いふなり

ことのさ　詞種とも

此歌と前歌とを合せて一として見るべし

よろづの風　文章詩賦和歌郢曲のるを

ゆ中よりめ（を）ちらひく今を詳せり

あわせの人とゆひめ（の）ハあるをもて

ひとの比の歌ハとゆひやるさ家ともに

とゆひ今の世乃人とゆひそ世の歌ハそを

ゆひめ（て）うるわとゆひうそや今を

とゆひむ（し）ゝ比人乃とゆひむ（し）の人を

ひくゝるひもむ（し）を何ぞ世をうして

今ハそゝと評論ふかるなり

いけ〳〵ともあれ志ゝ
めさしるゝへらもれそ
又なりきぬるまゝに山里をと
いとめるれぬ事のをあらる紙
へそらもとそ風うその事
の事候宜ゝかそ
こそおゝ〳〵れさやら法にそこそ
第ゝへつひとめともてる調度
まそよまいよく結
きんしそらもいと
おゝところ

又仏寺社るいてこもも
うもおう

神楽こそ多くなりうもれ
おくるものゝ初ハ笛笙篠
やこきゝ琴琵琶

神楽乃起るハ天照大神天の岩戸
をかくしてこゝろ時天下とこやこ
ふなるとなわち諸神いかりをされるに
天細目命（アメノホソメノミコト）海さきのうゝをかつゝ
ひうけをもちてうゝひまひ庭
燎をもちて紀ーるとまうすと古語拾
遺ふるてくるに梁塵秘鈔ハ源山ま

あるとかるらく和琴の調子あるを庭燎のうちに
色つきたりとあるを庭燎のうちに
のをられたり又内侍所にて御神楽一源
流れ所をたうとて陽身に行りる
承保すると毎年に行りる毎年に所に
内侍所西面へわたりをはりて三年
を限て新へかへをはりをはりを三ケ夜に
は神楽あり是を別して御所にこ
ふりるりてをとうとて御神楽の時主上
行幸あり庭燎をきさきなまれ座と

まうけ笛篳篥和琴笙
小拍子なんとをとりて舞うふるをと
ちちくの事相承鈔ふ又ると
琴 一すはあつまりとも名つく昔神
代小はら六張をなくてひきけるを琴
琴につくりて六絃とうけて弾をとり
四十ばかりの楽器はつらふ
すると花鳥餘情の序にあつまりとも
器のうつにをさ常をすつつれをれなに
ちふとあり

つゝみきゝ琵琶和琴うとある、琵
琶の事にきゝ琵琶ひさゝうゝいち
とあり、毘沙王宮一とも

山ちゝうあこすゝ仏ゝつゝみ
つゝこそほれもゝ心乃ゝこゝろも
きゝ琵琶ゝ琵琶ゝ

人ハおのれをつゝまやかにしてたからを延けて
財をもりとして世をゆたかにたのしまんとならは
ある人きむしするもかしこた人の富るは
まれなりとよろこびに評由といひつゝ人ハたゞふ
貧ふえるかへりてくるしみて手をもとめ
して陽ける飲くるを見てたりひさことゝいふ
ものを人にえさせ返るまゝけさして時本の枝
うきそるとけもゝて渡ゆ梅かれてありけるを
かゝり南もてすてつまさるかゝりをひいて
ものみけらいふるを留らちすかりん

孫叔は冬月に衾なくして葛一衣ありけり
冬はさらふかくし夏はおきぬけりけり
しかしのへ人は是をいふとおりへハひ
さるはともあて世のつとへてあこまて
人はかならても偽ふへからして
たゝまやり　約乃字也倹約と守る也
むかしらかしこき人のとめるをかかほする
孟子滕文公上篇に為富不仁矣為仁不富矣
といふ伯夷叔斉ハ首陽のふもとに飢顔淵ハ
一巻に南りて糟糠よくもあらず冥

子憲ハ蘆花の絮うちきて原憲ハ桑のと
ふりそ雨をもり子夏ハつゞり衣をきて貧し
南華老人ハ粟を監河侯にかり五柳先生ハ
環堵の風をふせぎかねて浣花翁ハ家破きて
常に傘をもちて貧し陳後山ハ衣をえうちそけて
寒くなりけるとき此人おほゆり
許由　堯天下をゆづらんとのたまひけるを
きゝて去るを荘子に見えたり
高士傳許由隠箕山以手捧水飲之人遺一瓢
得以取飲々訖掛於樹上風吹歴々作声尚以

為煩遂去之
なりひさご　ふくべなり　和名集に云瓢
奈利比佐古斟水器也
心のうらすゞしかりし事　心の清涼なる
あり白楽天が詩に但能心静即身涼
孫晨　蒙求云孫晨字元公家貧織席為
業明詩書為京兆功曹冬月无被有藁一
束暮臥朝收
かゝりし此人ハおのれをつゝしむとおもへり
代々の史を見侍るに本史なら伯夷傳を作り

しらるる俗世乃筆とまれりの隠逸の
ものためよ傳をしてそとふてするの
ら渭富の清貧をもうさなるすがちを
ものかやちうもちう大内の高濂久八戯の
絵り麿外遐拳戯をあげて古今れ間世
をうりて天下をあらん　或八俗をのう
まく貧賤をあ海るふりの一百條人を
載たりうしとあとへなるもや

れ節乃ちうりうこれりのことに
ありしなるもも乃あれ八秋こそは
さ神と人とふいりのれとそれもう
ありてどいきいんもうきうりのい
まう乃やきふいそ西めれ今のあ
あともも事れあ春めきそのやう
なるの口影よかきてのもえうる
こ詠ちる風ちまちうて花
もやうくうきふかとこそあれれ
しも雨風ちうきて今あいうく

ちりすさぶ春風よ花をちらすな
はるたつ山の峯のうすゆきは花
にまがふこそあはれなりけれ
ふるさとの春もすぎゆくうぐひす
のなくこえのみ山のかすみ
かくるるまでなほ聞ゆるかな
てらたきとなりしゆ
ゑ
灌佛の日
ちる葉の梢にのこるかとこそ
世のあらんかぎりも人の意
人のなりとなるまで
こそけさぶ

神無月
雨あらしつゝ
雑乃さくなと心
比あやしき
牧を夫ゝと
又ゝ七夕
やらぬかたに
ふる
萩乃
うりとゝ
おかる又野
ゆ
ひつゝ

今さらに

たとへとかうれたとおもふるも又
いとしもあらしおかりきるるいろの
はけしかるわさうれ筆よりまうも
つおらきるあすさひそうづやうす
はへきあるれいへのろへきあもあは
さてゆうれのやきそ秋はおきく
をとかまりうれ汀の子お至乃
ちうとはうて若とをとうつをけう
外やうるうち烟のうつをうれ
後乃名りそうへうきあへる比

そ又秋あれ為ふをまきるの
ふりてそうへも秋月のさむく
すめうせりあてうのすそ心かそ等
物るれ御仏ふ前おのようかとそ衣
ふ為へとれき弓事とも一けく
ちうへいうきるとうをかてもりう
おこるりるさはそへうきや追儀
ちの言葉ふはくこそあるれ
はこうるれ夜へうくうきる松と
もりるて為まうるまそへ乃

ゆきて今年まで
あらんとしるしてあるを見
るまもなく時うつりゆきて
成ぬることをなげくも
なき人のなげきてつるかき
絶ぬるなげきまとはるる
事をそ　こそあれるうら
うらに時ゆゑ思ひ立かうら
うとゝ思へ初とひきうめつゝ
さもちそすると天師のさほうを思

て花やうう神はけるこそまこと
れなりき

打聞のうりをかうる　此服兼好
うる枕草子源氏物語に似るもに
其筆力つゝてう清少納言二女の形容
ん〻源氏幻考うるとうわき十二月
に感哀をこめ物
の哀八秋にそまりされ
梅遺春八花のひとに咲中の哀秋
花面ゆきなり　源氏表秋のあるひよ

昔より秋にいたりてハうゑのゆきうり

白樂天詩大底四時心惣若就中腸斷是秋天

いとうさうりの八表ゝ

東坡の妻王夫人汝陽堂にて春夜の月を

りてあそひ春月八秋月よりさうり

とゝ八ゝ趙德麟の侯鯖錄にてうり

月さへ春ハ秋よりさやけしと云人あり

しかるに花鳥のゝ音もいかゝ

鳥の聲をとも　陳國南野花啼鳥一般春と

ゝ八ゝ詩よりうり又東坡の詩に春山

磔々鳴春禽此間不奇無我吟

のとやうある日記　長閑と云

東坡内制集五云仙家日月本長閑送臘迎春豈不然　杜子美の詩に遲日江山麗春風

花草香とあり

やゝ春ふかく　やうゝ春ふかふかう

ゝ百花ゝ百ふ

ちりそゝめる花葉　主賀の詩に云

雨前初見花間葉雨後兼無葉底花

只ん[illegible]す　王荊公う春色
惱人眠不得と　[illegible]
[illegible]
[illegible]　古今よ　さ月待む
橘乃香をとけ　音[illegible]人乃袖のうそ[illegible]
なに梅のにうひ　花橘の昔を思ふ
さ[illegible]　梅のにうひよ　昔
もとひさ[illegible]　梅花あらぬ色し　昔
にて　[illegible]
梅のにうひ　[illegible]

り色ものこれ家[illegible]　梅の花
乃さうよ去年をこひ　西対へ
[illegible]　在中将なり　羅浮の梅花のと
よて　淡粧素服の人と酒[illegible]
道師雄　[illegible]世とい[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]香とくりの義之　廣謙う徒
よ[illegible]　詩人の家[illegible]
前村乃一枝園林の中樹　雪の時
むつ[illegible]

山吹のきよらか

灌佛のこと　うるはしう夏のてをしふ

灌佛八四月八日よりこなひ

佛生會八推古天皇よりうちまつる釈迦如来

の倶毘羅城にて生給へる時天竜下

て水をそそきて釈尊をあらはし奉るを

をりあり公事根源に見へたり

遵生八牋第三引古樞經曰二月初八日乃佛

生日也周建子以子月為歳首是以十一月為

正月也荘王九年四月初八日釋迦生以子至

卯月是今二月也二月八日為佛生辰無疑

今不知者不考歳首建支猶以四月為成

規何其謬歟

祭のこと　賀茂の祭をこなふ賀茂乃

國祭八四月中の申日にこなふ是賀茂の

本祭なる故賀茂祭八中の酉日にこなひ

人こあふひかつらをうけて祭はてゝ前日よ

賀茂松尾の社司こゝあふひをさゝげ也
此祭ハ欽明天皇ゟ始り又申日ゟ
関白の賀茂詣と云ふ也
根源ゟ見てゝ
ゟ家ゟの情涼しきに　白樂天詩緑樹
陰前逐晩涼
夏月あやめふく事
天平十九年五月ゟ
勅ありて百官諸人ゝ菖蒲の蔓をく
ゝかけさゝんものハ宮中ゟ入る事すと定
めらるゝ弘仁式ゟ五月三日平旦ゟ菖蒲ゟ
りさ花ゟと南殿の前ゟ切くとあり
事根源ゟ見てゝ　拾芥抄云五月四日主殿寮葺内裏殿舎菖蒲
事大類抄前集云端午以菖蒲或縛或屑泛酒又
云端午刻菖文為小人子或葫蘆形帶之辟邪
沂公帖子云明朝知是天中節旋刻菖蒲要辟
邪　荊楚記曰五月以艾縛二人形懸于門戸上
以辟邪気
早苗ゟ　郭恒云
きのふ
ゝ
ゝ
白樂天詩碧毯線頭抽早稲

水鶏乃たゝ皇　たゝとハ鳴なり

海士雪にうもれてそてを水鶏の音う門さ

しそれぬ　源民明石よ春秋の花

和泉のさうなるらハそこもとなく

成もるうけともうゆめうつきに水鶏のうち

きてきそるハたう門さしてと袁よたうゆ

とあり

なのゝ中さ袁に夕うゝ心　源民夕皇袁よ

ゆめ白くさけるとうゝ夕ゝやとゝ仕る花の

ゆハ人めさてゆうあゝ中さ垣ゆよ咲仕る

とゝ

物語の巻よ任仕る人ゝ夕うゝの花とうゝの

歌ゆつうゝ者るうと背山の山人よ者

けもた世をこゆゝそこの袁よありとて

告もしそら海うひて其袁をひさ

乃うゝ世の中ゝ人ハゝうゝを乃くもむて

晉書をもむゝの額のゆよはくらん字を

ゆゝ人さるうゝとく秋とさこ袁をあま

とゝと口をしうくそゆ（ゆひ者ゝ）

う志也仕ん杜子美う除架の題注よ弧架

詩宮人蚊蚊詩
幾回揮扇撃
雖去繞被薫
烟郎使除

拾遺雑秋
老鶴哥
之所乃水煙
ゆをき蚊遺
次よすけぬ
あくゆ新り

ありとあり其詩ゆ云東新已零落鮑葉軒蕭
疎幸結白花了寧辭青蔓陳秋裏聲不堪暮
雀意何如寒事今年落人生亦有初杜ゆ集ハ
人の家ことにあまと今ゆ人ハうくらうて
ありのもくゆ此時ゆ顔巷ゆ動と
云ふとと書く孤
蚊巷火　百合恋歌文の枕ハ有ゆ此ゆ
ゆ巷火ゆ云ふてわうをかもとん
宵祓　八雲抄ゆ云六月祓祭神とう
あこむゆ故ゆあこうと云ふ河逸ゆいう五十串

をそあさの気ふるとにて正ゆ地ゆ夜ゆ
ゆ後撰ゆ賀茂川のみそこ清て暑
月をけてうんとや夜ゆ題ハ三月ゆ
ゆこに河原に向りあて月のあるゆみく
といふ云ふ宵晩へそこすて暑
月ゆ夜ゆ宣東河の注云みな
月ゆ明月ゆ也人結之古人宵ゆ流出
川原流祓又俗説作ゆ逆及詩ゆ
異恒例也百限晩日是祭皆月祓長ゆ
比或人記ゆ餘小舎人未可黎皆月祓

由緒ゝ件ノ祓六月十二日也

公事根源ニ云大祓ハ六月晦日百官ことゝ
朱雀門ニあつまりて祓をするゆへ六月十二
月二ゝひあり天武天皇の御時ゝ始まる
又今日家々ゝ輪をこしらへあり三月
のみ巳のもゝ人々歳のみちのふ
とゝあり此歌を唱ひて申侍へ侍る
ゝゝ法性寺関白の記ニあるゝゝ
祓をあさのもゝ祓ゝうりてしもゝ
ゝゝゝ此ゝを詠ずと見えたり

延喜式第八ニ六月晦日大祓の祝詞ものも
ゝをしるゝ今上部の家ニ中臣祓とゝるゝ
大同ゝて首末の文ゝ小異ゝり
六月ニ閏月あるゝ祓ゝつゝこの月ゝ
とゝふゝ後の六月ニ閏月とゝふる
事理ニ見てゝゝり
七夕まつる　是ゝゝ秋のゝゝゝ
公事根源云七月七日の夜ゝこゝる天
平勝寶七年ゝゝ始まる乞巧奠ゝ七
夕祭ゝ云也　今夕ハ牽牛織女の逢夜

のまへに烏鵲天河よりきたりて翼をつらねて
橋となりて織女をわたすこと淮南子續
春秋記ものとにしたがうこうの香花をそなへ供具
をととのへて庭上に文をかさね竿のたてに
五色の糸をかけてすをかるる三年乃
四よりかるるとこうこの故に乞巧と申也
風土記曰七月初七夜酒掃中庭施几筵
設酒脯牽牛織女相會守此夜者感懐私
願或曰見天漢中有奕奕白氣光曜五色
以此為徴應見者便拜願乞富乞壽乞子
者乞子惟得乞不得兼求三事乃得
やうやうあきちかし　八月の比也
鳳なきてうる比　月令云仲秋之月鴻鴈
来
萩の下葉色づくなと　季秋の比也

おぼつかなき　世間序ふぜんあり
あふうはぬるもんちしけるかまくらに
ひとりぬいるまりくるあるを
かはをていらひいをかりあめ
かいやりすつきゝ　ちやりすると也
けてをれの宝色　色をとをふ
をさく　源氏物語ふ多き詞也頭とふ
ろわも

すき間きあわて
源氏あさふの差ふ所ふつきて人のふをうつ
をうろ花の葉れけりをるとしそれ事のする
月ふ君ひとりあひるる夜そうあやう
色ふきとれ文ふをてせけのとまて
たるひかれたらしあわさ
れるあたをすき間きをりふ
ひをきゝん人れんあさをてみをまき
あけをせ侍ふ　徳蘭ふ人れすきま
きとふふすうをてその月れりり

なくいそぐ。河海云清少納言枕草紙
ふすま海きの上すの月夜なりける
けさう。又十列冷物小十二月月夜扇あり
筆ゝ記ふ上すれちの月いとあつき
小物語しけるを人をこまうあふすま海
上すれ月夜ふあるといひ。とてあ
ゝ上なりる。
御仏名　十二月十九日より一日まて三十日
なり或ハ一夜も例あり此仏名とハ三世
の諸仏の名号を唱て六根の罪を滅する道
場ふ仏名経ふ七ゝ仏の功徳をたゝ
ふきふ。寶亀五年十二月ゝ始まる最
初の比ハ毎年仏名三十日ハ何ゝ法華経
殺生禁断のゝ格ふ貴ゝ多ゝ
根源ふ軽ゝ
元亨釈書九釋静安伝
西大寺常騰学法相嘗居比良山讀十二佛
名経礼拜修懺其声聞帝聞諸州間有聞
者因茲敕賜僧官承和五年奏置宮中季
冬佛名懺
荷前　十二月吉日を撰ふ先十三日ふ上ふ

をかなして宣らる使いを郷の殿上人のあり
荷前ゝは十陵八墓小年に孫ゝ小幣帛を
ゝ也ゝ給ふ也先十陵の中一ゝ天智天皇に
けるき山城國山階小あり昔此帝法馬小
めされて山ゝぶの墓小行幸ありてそれまく
還り給ふりき然るに崩殿をいりくとも
ゝる人なり唯御沓に
小陵ゝ
ゝ不ゝ白壁天皇に田原にみさゝき桓武
天皇に柏原にみさゝき崇道天皇に八ゝ
陵仁明天皇深草に陵ゝ也ゝ
小及りて
延喜式祈年に祝詞小荷前ゝ也て
ゝつかゝ須ゝ
公ゝ
禁中小行ゝまつりゝ也
追儺
ゝ根源ゝ十二月晦小行ゝ今は
なやらふ被ゝれゝ大舎人寮鬼をけゝ陰
陽寮祭文をりて南殿の邊小ゝきてゝむ
上卿以下ゝを行ふ殿上人ゝ御殿の方
小ゝて桃のゝ葦の矢小て射ゝ

入て東庭に集て流行に出す今夜洛中
より史を多くよりて東庭朝餉臺盤
所にまへ乃みきを小灯臺をひりゑて
とりてより追儺と云ふ年中の疫氣を
はらふ鬼とふ方相氏に矛を四目
ありてかぶりける面をきて手に楯
矛をもつ又侲子とて仕人紺の布衣着
らるを卒て四嘉に四門をはるを慶
雲二年十二月の初まる此年天下小百姓多く
疫癘小悩されけり

あるを小儺い疫をはらいはふ戯やう
なれども礼記に礼儀志小儺
載せたるまるを後世の礼儀志小儺
さしてと云るのは文選ふのをさる
張衡の東京賦小詳なり其辞曰卒歲
大儺驅除群癘方相秉鉞巫覡操茢侲
子萬童丹首玄製桃弧棘矢所殺無臭
飛礫雨散剛瘴必斃煌火馳而星流逐
赤疫於四裔然後凌天池絶飛梁捎蜮
魅斬委蛇斬騶狂斬蜮脳方良内耕父於清

淪溺女魅於神潢殘夔魖與罔象殪野仲
而殲游光八靈爲之震慴況魃蚩與畢方
度朔作梗守以欝壘神荼副焉對操索葦
目察區魃司執遺兇京堂密清固有不難
云云又後漢志亦多有此事
四方拜　白日拜
偶星ととなへ天地四方山陵を拜祈て幷
災祓ふ宝祚を祈ひ奏し伯
ますやさ事きいれ給ふと見えたり　仁和五
年四月寅刻ゑ天地四方偶星山陵を
拜　右宇多帝の御記ゑあれと陰鑑
とい見へたり又皇極天皇雨を祈なまとて南淵
河上ゑ行幸ありて四方を拜し向ひけまて
雨五日ありける由日本紀ゑ載たり
是なとをやはしもやうに其上偶星を
拜して災難を除く疏ハ天地瑞祥志とふ
書ゑも見へたり
是を中ふ伝ふいとをくあるく義也
源氏あるひの巻ふあるを中ふてぶれ
ありてゑひあ

なき人のくる夜とて玉まつる　曽祢好忠の歌

玉まつる年のをはりに成にけりけふにやまたも
あはんとすらむ　此哥拾遺にあり

たまは竈神を云なり鎮竈とかきて海
しつめと読也

明ゆく空のけしき　年の暮まてといひかへ
て又あらたまりぬることをいひていふ
此段の發端に折節のうつりかはると云
出しよりたによく首尾をそろへたる文字にまる
と男子の文法に異ならぬ也と是を常山
の蛇の首尾相救ふといふ文は此段をさとる
間に源氏枕草紙の例をひいてとくゆる
やうにしてこれまた筆法なり

大路のさま松たてわたし

素盞烏尊の南海へゆき給ひし時宿を
巨旦将来にかり給ひけれどもかさゞりき
蘇民将来屋をかしたりけるに後尊いま
て巨旦をほろほし其家をかゝはらする是を
後の世まて此志るしとさんとて巨旦の墓
乃上に生ゆる松を年の始に門に立ける也

ゆゑ晴明の簫簫内傳ふんてんと
さ候四季のうつりゆく次第風物景氣の形容
筆ふゆるる恋おりるく見て作る貫之の梅
をうたしまるとて郭公をきて茅屋
行り雪を見るふるまてといひ曽丹の
あるく海辺年のみちふあるまて芸ちり
ふりをを行とかひ秋をかりる本の葉ふん
ををくへ友いうひてゆふむしひそい
けひき宿ふむりれるてあまさるやとてひ
をわけすきゆく月ををうつおけてい

るひさかたの月のまをすすかと
ふむしの人乃四季をいひ人へるは物多
るへ〜と後清蒙の二婦人をなきてを
美姫の詞すも侍詩文まとうるとき
顔凱之の四澤の水奇峯の雲明暉の月
孤松の嶺東坡先生の四時の詞ふるまて
節序を感ずとてとうるるもの〜ち氏雅尚
斎の四時の幽賞〜〜今一きとあるま
ゆるるとかたの〜〜

容斎随筆十四云士之慶世見紛華盛麗當

如老人之撫節物以上元清明言之方今年壯
盛晝夜出游若恐不暇燈牧花鼓輒悵然移
日不能忘老人則不然味嘗置欣戚於胸中也
かくれなくまたにてんをうつ物小栄立灰心乃
者小あるとんいかさるる風一草如のんまを
をそるとそとそ又花鳥小涙をうきんを
うこうその感慨あるへ

ぬ
ようとやしらぬ世人の世界
かうもうぬ多くそのそ
乃こそおきてうしらさとと
さも見こんくれ
所小一 某の家を渡へ
世のから 夜 世ふうきのみ夜山
涙いんかはたこ人こうはこ感を
のこ夜家小 こ夜方也
これ春 年月乃うゆくうとを

内閣文庫

あらくたかうて也李白ハ豪放ハ謫仙人ニ
て餘春を惜しむあり
或人のうたうてハ大德寺乃僧休あまり
四時よ茅ヶ崎ときいてとしの暮
ゆ山路の心ようよんで行川のあま
ち絶えてさらもゆとのあるなかすす
と鴨長明うしひ者ハ詞ハやさしくれと
晝夜をたてさる光陰矢をはしるそうな
ゆへ

昌平坂學問所

国立公文書館
National Archives of Japan